

Title	<書評> 北村敏泰著『苦縁 東日本大震災 寄り添う宗教者たち』
Author(s)	星野, 壮
Citation	宗教と社会貢献. 2014, 4(1), p. 75-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/27458
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

書評

北村敏泰

『苦縁 東日本大震災 寄り添う宗教者たち』
徳間書店、2013年3月、四六判、408頁、1900円＋税

星野 壮*

1. はじめに

東日本大震災から早くも3年を過ぎた。政権交代、東京オリンピック開催決定など震災の記憶が薄れるようなニュースが報じられる一方で、被災地では今もなお「復興」から取り残されて、苦境の最中にいる被災者たちの姿がある。本書はポスト震災の動向に覆い隠され、遠隔地の人びとの記憶が薄れるなかで、ふたたび記憶を賦活させ、思いをめぐらせるきっかけを与えてくれるだろう。そう思わせてくれる渾身の力作である。

著者の北村は全国紙の編集局部長らを歴任し、現在はいわゆる「業界紙」である『中外日報』特別編集委員を務めるジャーナリストである。全国紙勤務時代から現代社会における宗教の位置について精力的に取材を続け、現職就任後は『中外日報』にて2011年12月22日号から2013年1月1日号まで連載された「いのち寄り添う 大震災 苦の現場から」を担当した。宗教団体や宗教者による被災地の活動を、宗派・地域を限定せずに伝え続けた連載は好評を博した。結果としてそれらの記事群を加筆修正したものとして、本書が刊行されるに至った。

「苦縁」という言葉について、カバーそでに「「苦」を契機に生まれた人と人とのつながり、寄り添うという行いによって生じる、生活上の付き合いレベルを超えた心や魂の内奥にまで関わる双方向の連帯、という意味を込めて私が提示した言葉」とある。被災地にて無数に生まれた「苦縁」のあり方の諸相に迫った本書の内容について、以下では少しく触れて論じてみたい。

2. 構成と内容

本書は「はじめに」という緒言のあと、序章と終章を含めた全9章が本

* 大正大学・非常勤講師・YFA40223@nifty.com

文としてならば、「あとがき」が添えられている。内容的には、被災地の宗教者の体験から語り起こされ、現地での支援活動、遠方からの支援に駆けつけた人びと、超宗派による取り組みや新しい試みなどへと展開していく形をとっている。

序章にておおまかに全体が紹介された後、「1 死と向き合っ」では岩手県、宮城県において、地震・津波による地域の崩壊の危機に向かい合った、土地の宗教者 5 人の事例が取り上げられている。どの事例においても宗教者やその家族は罹災しつつも避難者を受け入れ、突然の大量死に対して時には涙を浮かべながら追悼し、自身の信仰について問い直したり、強めたりする過程が描き出されている。

「2 原発さえなければ」では、題名の通り原発事故によって避難を余儀なくされた福島の人びとと、それに対峙する宗教者について書かれている。各種メディアでも報じられた、放射能の影響によって廃業し、自死してしまった酪農家について取り上げられ、この地域の苦悩の深さが浮かび上がる。しかし、そのような苦の現場の最中にありつつも揺るぎない信念を持って、土地と人びととともに歩もうとする宗教者が存在する。北村はそのような宗教者の姿の中に信仰の真髄を見いだしていく。

「3 支援の広がり」では、被災地において支援活動を行う、(主に) 現地の宗教者たちがクローズアップして取り上げられている。再建が絶望視された寺を檀家や外部から支援者たちと立て直していく住職、全国組織の力を借りつつ被災者の支援に注力する神父、宗教的な背景がありつつも世俗的な支援団体の中において活躍する人びとなどが取り上げられる。そのような中で、宗派教派の壁、宗教者・非宗教者の別という区分が揺らいでいるのではないかと北村は問いかけている。

「4 駆け付けた人々」では、震災前から苦の現場に立ち会ってきた、斯界ではよく知られた宗教者たちの被災地での振る舞いについて取り上げている。現場を「見てしまった」(p.175) ことから活動を開始した先駆者たちも、被災地でふたたび苦に向き合いながら、必死に活動を続ける。彼らのこれまでの蓄積が被災地で有用なことはいうまでもない。そのようなことより北村は、常に弱者の側に立ち、言葉ではなく行動をもって「宗教者」であることを示すのが彼らの特徴であると論じる。

「5 支える思い」では、岩手県釜石市・大槌町などにて支援活動を続け

る現地僧侶とそこに駆け付けた僧侶が描かれている。東京での自死を防ぐ活動から得た貴重な体験を被災地でも生かそうとする僧侶が、被災地の僧侶と交錯し、共感が芽生え、縁が生まれる場面。震災を機に地元で生まれた新しい紐帯。孤立する被災者をつなぎ止め、結びつける女性僧侶。まさに「苦縁」が生まれる現場が描き出されている。

「6 心のケア・宗教の力」では、超宗教・超宗派・超教派の慰霊・支援の場である「心の相談室」・「カフェ・デ・モンク」、そして全国展開への様相すら見せ始めた「臨床宗教師」にかかわる宗教者たちや、その動きを支える研究者たちにスポットライトが当たる。「神仏を語るより前に、目の前の人間の苦悩について深く知ろう」(p.280) という、ともに教学・神学に明るい僧侶と牧師の言葉からは、「机上の論」としての性格が強かった「宗教間対話」が現実的に成立するためには、北村がいうように「現場」と「祈り」(p.267) が重要であったことを知ることができる。

また本章では、地元の宗教者の連帯の強さと、遠隔地のからノウハウを持つ宗教者たちの経験とが被災地で有機的に交わり、それを知的な面だけではなくマネジメントなどにかかわって、公共的性格を担保するために全力で支える研究者たちの努力が加わる様子も描かれる。北村もその動きに強く共感している様子が看取される。北村のようなジャーナリストの動きも含めて、このような試みが続くならば日本の宗教界発の新たな社会運動になるのでは、とすら予感させられる。

「7 つながり、そして明日へ」では、他章と同じく被災地にかかわる寺院住職たち以外に、新宗教による支援活動が記述されているのが目を引く。伝統宗教にくらべ、本部から指示を受けて迅速に「最も組織的かつ大規模」(p.356) に派遣されたのが天理教の「災害救援ひのきしん隊」である。日常的に訓練を行い、重機の扱いにも長けている同隊の根幹にも、「信仰」が据えられていることが北村によって確認される。被災地で天理教であることを強調も隠しもせず行動し、被災地の信頼を勝ち取った同隊のような存在も、復興・支援における重要なファクターであることがよく分かる。

3. コメント

さて、本書はいわゆる学術書ではなく、筆者の「立ち位置」も明確であ

り、それは一般的には研究者のそれではない。通常学術書になされるような書評が、果たして本書に対してふさわしいのかという若干の疑念を評者は抱えている。よって以下では拙い読後感を記していく。

まず、今回の震災に際して、本書ほど網羅的に宗教者・宗教団体による取り組みを取り上げている書籍は、(学術書を含めても) ないのではないか。『中外日報』での連載、そして本書を著すために、岩手から福島まで被災地をくまなく歩いてインフォーマントを訪ね、彼／彼女らとの信頼関係を構築し、時間をかけてインタビューしたことは間違いない。以上のことに北村が払った労力は計り知れないものがある。このような北村の努力に対して、評者は心から賛辞を送りたい。

また北村の取材姿勢というのも、本書で取り上げられている宗教者たちが被災者に「寄り添う」のと同様に、インフォーマントや被災者に「寄り添う」ものだったと思われる。つまり当事者性を徹底的に突き詰めたと思われるのである。いうまでもなく、本書に込められた情報量は膨大なものである。その上に本書の至る所から、「苦悩」「悲しみ」「喜び」といった、おのおのが抱えている感情すらもリアリティをもって伝わってくるように思われる⁽¹⁾。

北村は本書のもととなった連載をスタートするにあたり、最初に赴いた場所として、(本書にも取り上げられた) 自殺した酪農家の厩舎を選んだ。なぜ厩舎を選んだのかという問いに対して、北村は酪農家の「死」や「無念」を少しでも感じとりたかった、そしてこれから訪れる多くの「苦」が存在する被災地に訪れ、彼の地でのリアリティを余すところなく伝えようと決心するためだったと答えている⁽²⁾。このようなメンタリティと態度が、本書の内容に大きく寄与していることは間違いない。

前述したとおり、本書は被災地での地元宗教者たちの苦悩と活動からスタートして、遠隔地から支援に訪れた宗教者たちの活動、そして両者の連携、さらに宗教者と研究者による新たな試みへと話が展開していく。これは期せずして東日本大震災で生まれた「苦縁」が、すでに大震災前から全国各地で展開していた「苦縁」による支援と、有機的に結びついていくことを、あえて意図して書かれたと考えることができる。事実、被災地での宗教者の逸話を取り上げている箇所でも、自死・貧困・無縁社会といった社会的問題と、宗教者のかかわりが随時挿入される。このことから、こ

れまでなされてきた宗教者による社会貢献活動との連続線上に、今回の震災における宗教者の活動を付置できる、と北村が考えていることが分かる。以上を踏まえて、最後に本書の記述を少しく引用しよう。

人々の「苦」の現場はなお東北の被災地にあり、そして東北以外のここ、あなたや私たちの目の前、「日常という災害」の場にある。そこ行って、互いに「苦縁」を結ぶことが求められている。宗教者たちの行いが、私たちに叫びを発している。

ここが「被災地」だ、ここで跳べ！（p. 404）

すでに震災前から「苦」は遍在化している。そしてそこには宗教者が寄り添ってきたのである。あくまで震災によってこの現場が、多くの人に見えるように前景化してきただけ、という主張である。そして「苦」がこれからも社会の中で遍在することは間違いない。そしてその「苦」に対して、宗教者は当然のこと、研究者もジャーナリストも、おのおのの流儀で「寄り添う」ことも強く要求されているのである。

今後も「苦」の現場がなくなることは、残念ながらないと思われる。そう考えると、この北村の主張に対して「宗教と社会貢献」という問題系にかかわるいずれの立場の人間も、いかにして「跳ぶ」のかを真剣に考え続けることが求められている、といえるだろう。

註

- (1) これは北村の巧みな筆致、そして受け手である各々の読者にもよる問題でもあるのだが。
- (2) 2013年7月8日、大正大学宗教学研究室で行われた「震災と宗教」研究会・第8回定期研究会にて、評者が北村から直接聞いている。